# ささやき　12月号　No.139

## 『大切な出会い』



今年の８月にリニューアルした、ジュンク堂福岡店に立ち寄りました。本屋さんに行くと、特に買うものを決めていなくても棚の間を歩きながら「何か面白い本はないかな」と探す時間が好きです。今回もいつものように店内を見て回っていると、思わず足を止めてしまうコーナーがありました。そこに並んでいたのは白い袋に入っている本。作家の名前も作品のタイトルも分からず、表紙には本の内容を想像させるような短いヒントだけが書かれています。いわば本との“お楽しみの出会い”です。いつもなら好きな作家の名前や気になるタイトル、表紙のデザインなどを手がかりに本を選びます。でも、このコーナーでは中身を想像しながら最後は自分の勘を頼りに選ぶしかありません。読んでみて初めて「こんな世界があったんだ」、「今の自分にぴったりの一冊だった」と感じることもあるでしょう。思いがけず心に残る言葉に出会ったり、これまで知らなかった作家の作品を好きになったりするかもしれません。自分で選んだ一冊に、何か運命のようなものを感じることもありそうです。本との出会い方もずいぶん変わったなぁと感心しました。題名や作者を見せず、少しのヒントだけで選んでもらうなんて、なかなか面白い仕掛けです。選ぶ側もいつもとは違う気持ちで本に向き合えます。どんな本が出てくるのか分からないからこそ、ページを開く楽しみも大きくなるのでしょう……と、ここまで新しい本との出会いについて書いておきながら、結局私が手に取ったのはまたしても『ダイエット本』でした。あれから三ヶ月あまり。買ったことに満足して今もまだ本は読んでおりません。（毎度その繰り返し💦）運命の一冊との出会いを期待していたはずなのに、気づけばいつもの自分。書店の新しい試みに感心する一方で、自分の変わらなさにも苦笑いです。

子どもたちにも、思いがけない出会いから世界が広がる瞬間があります。何気なく手に取った絵本や、ふと目に留まった言葉、友達が楽しそうにしている遊びがその子の心に残り、「もっと知りたい」、「自分もやってみたい」という気持ちにつながることがあります。大人が選んだものだけでなく子ども自身が偶然見つけたものとの出会いを、大切にしていきたいと思います。

## ぽかぽか日和

園の「はかた弁コーナー」に置いているテントウムシのテーブルで、うれしい光景を目にしました。年長の男の子二人はクラスが別々になってからも、毎朝ここで待ち合わせをしているようです。朝、登園してくると自然にテーブルに集まり、二人並んで博多弁のプリントを書き始めます。たくさんおしゃべりをするわけではありません。顔を見合わせて笑い合うというより、それぞれが黙々と一枚のプリントに向かっています。そして書き終えると「じゃあ、またね」といった様子で、それぞれのクラスへ戻っていきます。その姿が何とも自然で、見ていてほほえましくなります。毎朝会うこと、同じ場所で同じことをすることが、二人にとって当たり前の楽しみになっているのでしょう。特別な会話をしなくても、一緒にいるだけで安心できる友だち。そんな関係も素敵だなと感じます。



また、お昼には別のクラスの男の子と女の子が、「あしたもここで待ち合わせね！」と約束している姿を見かけました。明日も会う約束をして、うれしそうにその場を離れていきます。誰かに決められたわけでもなく、子どもたちが自分たちで待ち合わせ場所を決め、そこに集まってくる。そこには、子どもたちだけが知っている楽しみや、二人だけの小さな約束があるのだと思います。クラスが違っても毎日会いたい友達がいること。自分たちだけの約束があること。そして、そこに行けば誰かに会えると思える場所があること。そんな子どもたちの姿を見ていると、この小さなテントウムシのテーブルが、一人ひとりにとって特別な場所になっているのだと感じます。はかた弁のプリントを書くために用意したコーナーでしたが、子どもたちはそこに友達と会う楽しみや安心できる時間も見つけてくれたようです。大人が考えていた使い方を超えて、子どもたち自身が場所に意味をつくっていく。そのことが何よりうれしいことです。これからも、子どもたちの何気ない日常にある小さな発見や約束、そして自分たちで見つけた居場所を大切に見守っていきたいと思います。

園長：讃井　理香